アウェアネス・リボン VOL.3

オレンジリボン
―白血病―

連載第3回は、白血病のシンボルであるオレンジリボンです。白血病の患者さんとそのご家族への理解と支援の意志を表します。白血病と戦っている人にとって、周囲の無理解は最もつらいことです。まずは、白血病のメカニズムを知り、その上で私たちに何ができるのか考えてみましょう。

白血病とは

いわゆる「血液のがん」のことです。血液は、酸素を運搬する赤血球、主に細菌やカビ、ウイルスを攻撃する白血球、血管の壁に張りついて出血を止める血小板などの血球と、液体である血漿成分から構成されています。

普段は赤血球の色で赤く見える血液が、がん化した白血球が異常に殖えて白く見えることから、「白血病」という名前がつきました。

今は容易に血液検査ができますので、血液が白くなるまで診断がつかないことはほとんどありません。以前は「白血病＝死に至る病」でしたが、現在では医学の進歩により、治癒が期待できる病気の1つになっています。

白血病の症状

白血病の症状はさまざまで、白血病に特徴的なものは特にありませんが、その症状は急性白血病と慢性白血病で若干異なります。

❶急性白血病の症状

血球のもとになる細胞は、骨の中にある骨髄にあります。白血病の場合、骨髄の中で白血病細胞（がん細胞）が異常増殖するため、血液をつくる場所がなくなり、正常な血球（赤血球、白血球、血小板）が減少します。酸素を運ぶ赤血球が減ると貧血になり、顔面蒼白、全身のだるさ（全身倦怠感）、ちょっとした動作での動悸や息切れが認められるようになります。

白血球が少なくなると、感染症を起こしやすくなります。その場合、発熱は感染症を示唆する重要な症状です（なお、発熱は感染症だけでなく、白血病細胞の増殖自体がその原因となる場合もあります）。

血小板が減ると、青あざ（紫斑）ができやすくなり、鼻血や歯ぐきからの出血が認められるようになります。

白血病細胞が骨髄で殖えすぎることによって、骨や関節が痛むことがあります。あるいは白血病細胞が血管外に出て、さまざまな臓器に浸潤し、肝臓や脾臓が大きくなったり（肝脾腫）、リンパ節が腫脹したり、歯肉が腫れることがあります。あるいは白血病細胞のかたまり（腫瘤）等をつくることもあります。白血病細胞が脳や脊髄の中に浸潤することもあり、そのときは頭痛、吐き気等がみられることがあります。この状態を〝中枢神経白血病〟、あるいは〝中枢神経浸潤〟と呼びます。

❷慢性白血病

慢性白血病は進行がゆっくりであるため、初期にはほとんどの患者さんが無症状で、健康診断の血液検査をきっかけに診断されることがよくあります。このほか、脾臓や肝臓が大きくなったり、リンパ節が腫れたりすることがあります。これに加えて、慢性リンパ性白血病では免疫力が低下し、細菌、カビ、ウイルスによって、溶血性貧血などの自己免疫性疾患を合併したりすることがあります。

記事提供：国立がん研究センターがん対策情報センターホームページより抜粋

「白血病は遺伝するのか」ということを気にする方がいますが、一般的に白血病は遺伝しません。ですから、白血病の父母を持つ子どもが必ず白血病になるというわけではありません。また、白血病の患者さんに接したからといって、白血病が伝染することもありません。一人ひとりが病気について正しく知ることで、このような偏見をなくしていきましょう。

また、自分とは関係ないと思っている方がほとんどだと思います。しかし近年、白血病は青年層がかかるがんの中では最も発生頻度が高く、青年の死因の上位を常にキープし続けています。定期健康診断をしっかり受けて、早期発見・早期治療を目指しましょう。

白血病について考える おすすめの本

チャーリー・ブラウンなぜなんだい?
―ともだちがおもい病気になったとき―

チャールズ・M・シュルツ 作・絵
細谷亮太 訳
ポール・ニューマン まえがき
（岩崎書店）

なかよしのジャニスが白血病で入院しました。そして病気に対する疑問がうまれてきます。スヌーピーやその仲間たちといっしょに、病気について考える、心あたたまるお話。